那久さ美草　八

并貞徳大意

和書門　類　一八九五六　號　一八〇　函　九　架　八　冊

内閣文庫　和書　類　一八九五六　號　八　冊　二〇三　函　一七　架

内閣文庫

番號	和 18956
冊數	8（8）
函號	203 130

綴じ部（喉部分）の文字等が開きが不鮮明な場所あり

国立公文書館 National Archives of Japan

ぜにのごとく神なごとく
晋ノ魯褒銭神論ニ曰親愛ス
如レ兄字曰孔方失レ之則貧弱ヲ
得レ之則富強無レ翼而飛無
足而走解ニ厳毅之顔ヲ開ニ難
發之口ヲ銭多者ハ處リ前ニ銭少者
居ル後ニ云云

火のかわきたるにつき
易乾卦ニ曰水ハ流レ湿ニ火ハ就キ燥ニ雲
從レ竜ニ風ハ從レ虎ニ孟子ニ曰猶ニ水之
就レ下ニ也

宴飲あそびうた
おそ久と云

音樂女文を

柳人のこ 是より上大猶長者
の詞を客て是より末
兼好ヶ論るり
論語注云柳ハ反語詞
猿わまとをとのひきんハ

銭ハ大猶長者のいちくぶへからわ
つをさしをさそひうふつま
法をつくへきさせずやしくそてハ
いまうひほしどあるのミを
へん法をはくんと思ひてず
へらくせんを心つるひを晩切
まへしをを心とりかハ化のこと
にあるに人ヲ常作乃どもな
作してしかりても無常を観ん

二百十七

くれはくこはる
秋の山里
八重葎ひとこれ
いはれり
無人
雲乃

後漢の馬伏波が守銭虜といふことし浮屠氏には是を有財餓鬼と云へり癰疽を病ものの貪富は人不ありし貧者ハ財を求むれども得ず富人ハ財宝多くあれども尚そを足らぬ事を悲しむ若又貧者も足ることを志さし安楽の身にして富人に似たり

まつたくなすれバ是第一の用心也次に万事此用をかねへられバ人への世にあらる自他につきて不許無量なり欲に隨て志をとげんと思へバ百万千銭ありといふとも足らぬもの也まへからず不孰ハやむはあし銭ハつらう弱ありかきりあう銭をもちくうきりなきをおもひ死にするやうのうへからず不孰心にきさすうあつハ我

をわろばまべき悪念おこれりとかくつくしこれそまそて不要をともなまへからず次に銭を奴のよくしてつかひ用る物と知るべしなかく名人昔をまねかうべらん君のごとく神仏とも拝まれたふとみて志をうへまもちかうとなすれバ次に恥にのぞむともいふともいつうつも家事なすれバ次に正直にして鍋をとらくすべし此義をまもりて利をもとめん人へ富のきそうつ火のへハまとるにつきぢのふされるにたてうふうとくするは也。

銭つもりてつきさる時のゑん欲ある人をとく
せん。居士をかきさくれ。不動をとるさまとも心とし
まへすりやよくたのしとやきし。掛人の不動をぬ
せんとさめよ。賊をぬすむ。銭を銭とすることへ。ねかひ
をかすふ家の故也。不動ある事ともうる人に。銭あれ
ともまさらんハ。金銀あまれ
にかし。何をとうさのしひと
せん。此を見てハ。さく人々の
望をたちて。貪をとうまへり

究竟ハ理即によりし
天台家に六即あり　理即
名字即観行即相似即分
身即究竟即是也理即ハ
仏法乃名字をもきかぬ薄
地底下の凡夫乃至畜類まで
て皆仏性を具するを云也
名字即ハ仏法といふ名を聞
たるより観行即ハ坐禅
修行する也相似即ハ仏菩薩
の行に近く似たる也分身
即ハ菩薩の位にて衆生済
度のために変現する也究
竟即ハ妙覚の位如来地也仏
となりハ凡夫之一切の狗子の類
にいまて悉皆仏性ありと
究竟ハ理即に昇といふ悟了
同未悟と云も此義也又本
有成仏作什麼為迷倒
之衆生とも云也

られとゆへんより。欲をとほし
てたのしひとせんよりハ。貪
かし賊ありけんかは。癰疽
をやむ者のおもひてた
のしひとせんよりハやまさ
らんにはしかし。おそれより
てハ。大欲ハ無欲に似たりといへり。

大欲ハ無欲に似たり　聖済総
録百九十九曰欲生則三尸生
欲滅則三尸滅故至人曰欲者不欲不欲者欲之云々慳貪の人々皆欲深
して銭半銭をたしめとも後生のためにハあまさへ金銀を費をいとひ
られハ極楽にうまれて金玉の堂に居て百味の飲食をうくる大楽に遊ん
との欲心ありゆへに今生にて布施をせうるゆへに無欲に似たり

寛竟ハ理即にひとし。大欲ハ無欲に似たり

第二百十七段

此大福長者のいひし事実にもおもしろく小氣なるものゝ天下にはみちて見されとも果報ハ前世の布施善根によつてうまるれハいかに心をとゝのへなくしても一銭貪なるもまんのことくとりつくれもつかうまて長者のゐりにせらるへしともれもかなり
ふ思しハ他家の譲にかとうゝされたおりて又道
よまてこゝかゝりをひくふてのもかりあるとをゝ
てこれをもちいて小氣なるもちりまて家をたえ

ゑはなす死ぬるものと云うへし小氣なるものハ
人よつ居しめられ未来まてはかなくして餓
鬼道にれもうしくうり果報をうけぬへし今生の
三宝にも布施をすへし布施のりうをいふに未
来に合ねうるも乞食貧人にも一銭をあたふ
れハそれをいふハ百文あり故に是を悲田といふの
なりのすくなき田にたねをまくふぬよふ
三宝ハ一銭をまいらすれハそのむくいハ無量なる事こ
れを福田と云三宝ハ佛法僧なりそのほかに
も縁なき縁あるを縁の佛とのはく久遠の尽
なるあれなりとし經曰今此三界皆是我有其中
衆生悉是吾子今此處多諸患難唯我一人

能為救護と云ハ此文の心ハ我よく人を迦るれとも尓
前経の間ハ浄飯大王の太子の三十成道して今
まされ仏なりとなのり或ハ東方の薬師西方
の阿弥陀など十方の佛土へ往生せよとすゝめ給
ひ法そ一四十二の時とまて説し経ハみな方
便なり真実よはくしてと又我身としてなりの仏
といひしも真実にあらず今我ハ此娑婆世界
の本来の主なりかくの衆生ハみな我子な
り他方の佛に縁なし我のミ救護をす
くひ奉ると説のへし経文なり法といふを
方便と真実との差別あり三十成道より七十
二歳の法時まてく説給ひし経ともハみな尓前

経といへるこれハこと仏になりかたき方便の教なり
七十二より八十歳のおはりさ八ヶ年説給ひし法華
経ハ衆生の成仏すへき真実の方をさとしむる
也さて一乗妙典とも号して此経をとかんかために
尓前経をは説たまふなり此上まてハ尓前
経をは信せらるなれとえすしてと乃至不受
余経一偈と説給へるを説とも正像二千年のあひたハ
余経と法華経とをまじへて人に説給ひし時
なれハ天台大師も尓前経をも捨て人の機嫌を
まもりて説玉ひせのひし也されとも御用捨真実
れ機りと申也末法に至りてハ罪かふき悪人のミ
まてさとるへき智恵もなく仏理をわきまふるに

知もなきさ時なりけれハあるべき実の法華経ばかりをよ
み給ふ世間法の功徳をさとすまで世縁をはなれさせて仏
種をゆるく時ふるれバ権教をまもりし一乗をならひゆるう
を但今用実の弘行とやけふいひすくなひとけハ
余経をとりも法華をとらんうちある法華を説
のふかうも衆生を仏になすべきむきあるゆゑ経は
仏になすハ法華にかぎる也されバ経文ハ余経の中
にも龍女八歳の龍女が逆達多の悪人なる間縁
覚の二乗一人も成仏をすべきるの人たちもなき
をかうりふ給すまれられかくれめをもかれても
実ふるハ実ハ之れ時の拙なり経に云三世の諸仏の
出世の本懐衆生成仏の直道となしたまへるの文を

見られハ法華経ハ龍樹乃法よはおつきすと受持
法華経名無福不可量法華経をハ福経と世
まや云ハ是もかやうの経文をすくいかつ華厳
も浄土宗の祖をはかりまなおうれしき禅
宗の人をと流れるふかうれそ此経の天台の六郎
をあきらむまし八禅宗の一空を西方よ
らいそとふ下心をふせて侍り

堀川殿　久我ノ一門基具太政大臣号ス堀川 基俊大納言父也
二百八
孤のうへにひつくるもの也。堀川

なるのまへ　仁和寺をなる
為まて念人かねるなほえを

一説云仁寺と八今の仁和寺より山のおくま野を
孤耳りくりうぐ。仁和寺まてよう

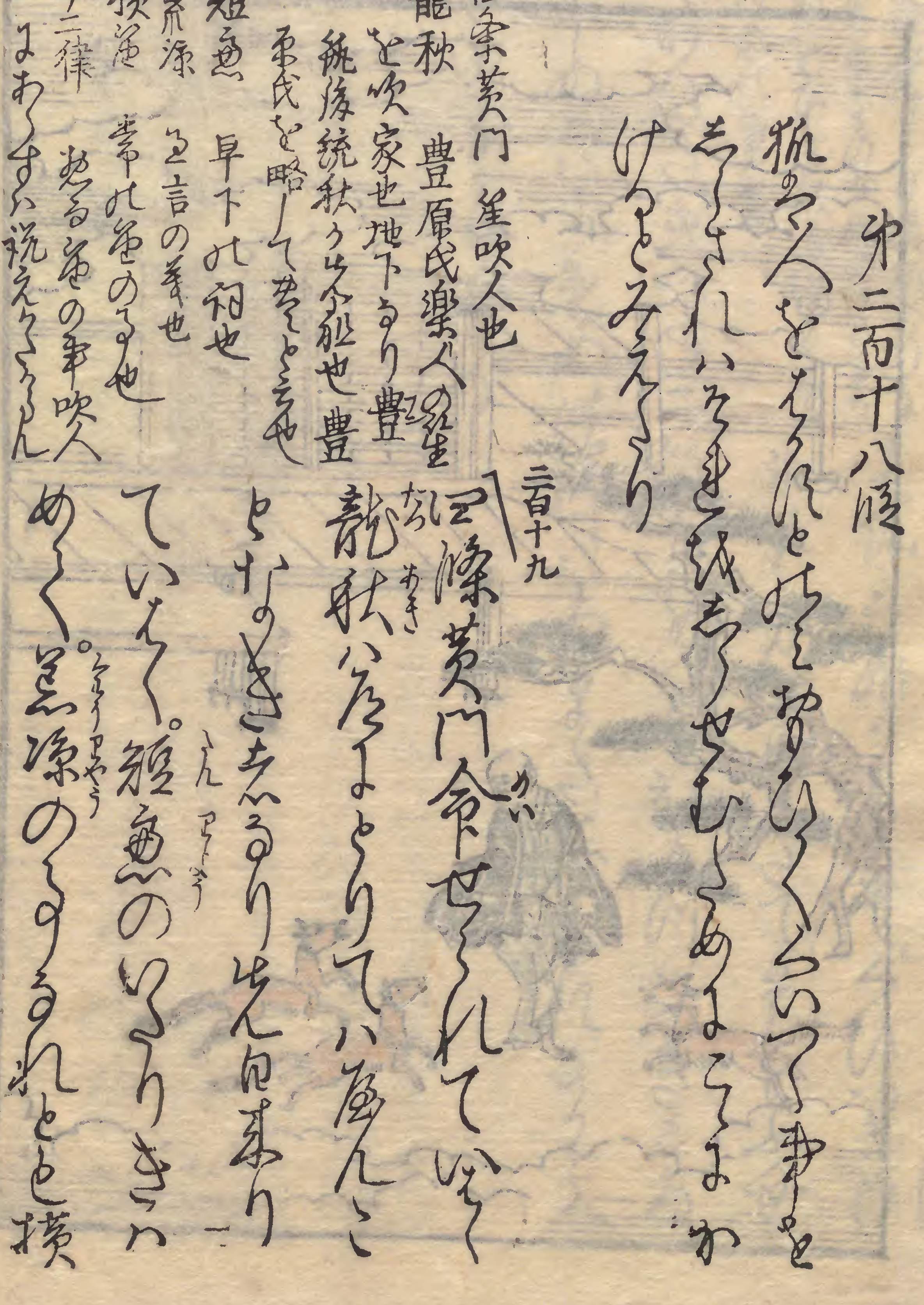
なるの皆をなりぬのやう
今もなる寺とそ号す
なちるのおをそうとそうり下法師

龍安寺より嵯峨へ行に
竜安寺の西の方さま
みどなかちかる場と云
いふ所也

に。狐三疋くつれてくひつきけ
されどもかまはずてぶどふせ
くわひさきつ〇二ひきをつぶしいつきころ
しぬ。二ハにきたぬ。法師ハあまる不くられなり。
とゆへすりきる

第二百十八段

狐の人をくらふと昔よりいひつたへ事を
志らされハこそ法師もあまたところくはれ
けるとみえたり



四条黄門 笙吹人也
龍秋 豊原氏楽人の笙を吹家也 地下なり 豊統秋が子孫也 豊原氏を略して豊といふ也
短慮 卑下の詞也
荒涼 わが言の卑下也
横笛 常の笛の事也
十二律 およそ笛の事吹人にあらずハ説えかたからん

二百十九

四条黄門命(かい)せられていはく
龍秋(たつあき)ハ道にとりてハやんこ
となきものなり先日来り
ていはく短慮(たんりよ)のいたりきハめて(くわうりやう)
あらハなる事なれとも横

又ハ人にもよるの略之

笛の五の穴ハ聊いふかしき所の侍
るかとひそかにこれを存す其故ハ干の穴ハ平調五の穴ハ
下無調也其間に勝絶調をへたてたり上の穴双調次
に鳧(ふ)鐘調をおきて夕の穴黄鐘調也其次に鸞鏡
調をおきて中の穴盤渉調中と六とのあはひ
に神仙調ありかやうに間々にみな一律をぬすめ
るに五の穴のミ上の間に調子をもたすして
しかも間をくはる事ひとしき故に其声不快也
されハこの穴をふく時ハかならすのくのけあ

へぬは天地にあまねく吹うちあはしかもしさ料

笛のいろまし徹に無あり先達後生をおそる

後生おそるへし 論語子罕 と云てこの事なりと侍りき

篇ニ子曰後生可レ畏焉知二来者之不一レ如レ今也

景茂 大神氏八幡の山井ナ

とふと出ろよ侍せ先を

笛吹地下ノ楽人也

他日に京笛の事侍しは笛

をとしへ打あはせてうちたれ

いよ/\めてたくなり笛は吹あふりいきにれてから

まてつけたくてゆく地すれは穴ともに侍

のうへに性骨をくはへて心をいれるあとを其穴の

こゑかきられ。さたへにかくとなりぬると

むかしたれおほしく物をいつれ乃穴をもちろよう

らず。上手はいつれもとまきありけれ。呂律の拍

呂律はそのまゝのはさかのて

首楞厳経曰譬如琴瑟箜篌琵琶雖有妙音若無妙指終不能発汝与衆生亦復如是

よかるにはさらに人のとかう也。ようハ

ものは失にあらぬをやき

第二百十九段

此段なとも呂律の道にまさる人のさため

には笙案なる段也万ろの世にあめのこし

さうこことをさためしぬ事をさたまるやうに

かれあれは菩薩乃道を心にかけし今をな

きこえ侍り

二百廿

何事も辺土ハいやしく
かたくなゝれども天王寺の舞
楽のミ都にはぢず。
天王寺の伶人の申侍りし。当
寺の楽ハよく図をしらべあ
はせて物乃ねのめでたくとゝ
のほり侍る事。外より
もすぐれたり。ゆへハ太子の

天王寺　推古天皇の御宇聖徳太子建立也。多聞持國増長廣目乃四天の像を安置するゆへに四天王寺と名づく

伶人　音楽する者を云。黄帝乃時伶倫と云楽人あるによりて後世に伶人と云なり

御時の図いまに侍るをはかせ
とす。いはゆる六時堂の前
の鐘なり。その声黄鐘調
のもなかなり。寒暑に随て
あがりさがりあるべき故に。二月
涅槃会より聖霊会までの
中間を指南とす。秘蔵の
事なり。此一調子をもちて
いづれの声をもとゝのへ侍るなり

そうせ

六時堂

黄鐘調のもなかなり　八月十五夜のうた　源順
水乃面に照月なみをかぞふれバ今宵ぞ秋のもなかなりける

涅槃会　二月十五日也

聖霊会　太子の忌日二月廿二日也

いづれのおとをもとゝのへ　尚書曰八音克諧無相奪倫

無常の調子　平家物語に祇園精舎乃鐘の声諸行無常のひゞきあり

祇園精舎の無常院
大蔵一覧第三云佛太極越
須達多長者建之云々
祇陀太子の園を須達もとめえて建之故祇園と申也
西園寺　拾芥云衣笠岡ニ在リ
太政大臣公経公家
浄金剛院　つき山の南太秦の東にあり旧跡なり
拾芥ニ云本名ハ天安寺待賢門院御建立也浄の字を法とするもあり法金剛院なり
院を滅の椎野にあり

とよき。凡鐘のおとハ黄鐘調なるべし。是無常の調子祇園精舎の無常院のこゑ也。西園寺のかね黄鐘調にいらるべしとておほくたび鋳かへられけれどもかなはざりけるを。遠国よりたづね出されけり。浄金剛院の鐘のこゑ又黄鐘調也

第二百廿段

六時堂の鐘の調子太子の御時より揃へておかせ
られし故に調子はあやまる事なしとかやされは
おりとてかへらず万事に此心をもちゐるへし兼好
九世の我心を定本にしてすゝむるはこゑのことを
遊し昔の聖人の事をおもひて事をよく見
てされはかやうにすへしその本をよく
あらく信敬すへしたとへは妻迎のすゝめか孫商人の称
のこともしるしはかりなりてなせもかやうにある
須らくかゝり孫さりすとも下手は自然つたなりそこ
れなりうは男はまかりし後生のみちをも大
事にはおもしろく人々経文ならくきく

経文も何経にもよくあるへし佛祖にかは
らず文字をもいとして流をも悪魔なりされ
ほとをかへりみずして用いれはかへりてま
はりも死道なきものはいつれもよきあるへ
きや

二百廿一
建治弘安乃比も。今の比の
放免乃つきものにおもひやうやう
綱代布宮文端にてあるを津
くりて。尾髪にかとりしことを
しこくへものかりさる

建治弘安　皆後宇多院の年号

まつりの日　賀茂のまつり此日也

放免　東鑑二十三建保六年六月将軍家実朝任大将為拝賀参鶴岡随兵江判官能範布衣冠着緒紬狩衣太刀郎等三人雑色四人調度懸一人放免

四人
くものいかきたる水干よつ
きて衣の心
くもの井にかれる紋ハつけて
かさみだらくふんハたれまし
道志どもの　職原下ニ検非
違使の下ニ道志ハ明法
道ノ輩ヲ六位ノ時任ス衛門志ニ即
蒙ル使宣旨ヲ也凡ソ志者奉
行使廳ノ諸公事ヲ之故ニ以テ
當道ヲ為ス其ノ撰ニ此号ス道志ト也
明法道の輩ハ使廳の志と
なりたる衛門府の志
となるを道志といふなり
つけもの　祭礼の時なり
ものつけ也上ニ放免
のつけものとあるも是
なり

る水干につけて。哥の心など
いひてわたりし事つねに見
及び侍りなどし。興ありて
しいだしたる心ちにてこそ侍りし
かと。老たる道志どもの今
日もかたり侍る也。近比ハ
つけもの年を送りて。過差
ことの外になりて。萬の重
き物をおほくつけて。

過差　衣服車馬等のかざり
より出る法令にすぐる
義也

左右の袖を人にもたせて。
みづからハほこをだにもたず。
いきづきくるしむありさまいとみぐるし

第二百九十一段

此故免今の世ふ伝へたる人なしとぞ此一
部の三十のえうの主一川とうけ給はり

二百九十二

竹谷乗願房。東二條院へ参
らせたりけるに亡者乃追
善ニハ何事が勝利おほき
と尋させ給ひけれバ光明真
言宝篋印陀羅尼とよさ
れたりけるを弟子のいひ

竹谷
東二条院　常盤井相國
実氏公の御息女八条ノ法印
也後深草院の后也
光明真言
沙石集二ノ下云醍醐の竹谷
の乗願房ハ上人ハ浄土宗
の明匠とやこえき亡魂の
菩提をとふらふニハ何の
法かすぐれ侍ると勅宣ハ
下りけれハ宝篋印陀羅
尼光明真言のすぐれ侍る

よしを奏し申さるゝ下にハ申請けるが念仏に
略之
まさることさふらふまじといふ申請たまはれと
申されし我宗なれともさらに申さるべし
るまつりともいふまじく稱名を退轉に候
して巨益あるべしとときまう経文をいかん及
なきをいかによみえふるとかきまいてとふせ請て。
いくしさんとおもひて。本経のたしかなるにつき
て。ばらい陀羅尼をそへ申つかまつりとて申さ
れける

第二百廿二段

此宗称揚の肝心に及念仏せむ経文のなきことを
聞てされて念仏とはなへまして陀羅尼を云
此名をあらはされし事まゝに因唯なき
字迦とかくれり云に則かくさをわめて意
好もなくよかられしなり世尊人迦一代の御説法を
わかちて五時とす則華厳阿含
方等般若法華涅槃と斜に法とうでいふ也法
華涅槃とは一時とさて四教とは三蔵教通
教別教円教也五時の内般若までも余部経
とはすて不成仏の種といふて又蔵も三蔵教通
教別教まで八仏の字千二界の作時流生死

性欲不同なるゆへにしゆ〳〵に説法す四十余年
未顕真実と侍ふをさしおへり又般若まで
ハ今日の人天の法華経をとき給ふべき方便
の経なり因茲法華経ハ釈尊一佛の説にあ
らずして人天のために出世あらし日月燈明仏
と申し名を説給ふありて二万の燈明仏法説給
ひし人天のためにて三昧にいて法華経を
説給ひしと文殊乃弥勒にかたり給ひける
法華経の序品にありされハ末代の衆生
に余の経ハ人天のためにこしの説法華経
ハ三世の諸仏の秘蔵したまへる御経と
人もしるべきなり十方佛土中唯有

一乗法無二亦無三除佛方便説とときあれ
ば此経文をとけ余乗頓悟の法師もえこそまよはね
後あてハおもへ〳〵さるへきことに不成佛の権教をとみ
れ信をとらす〳〵申條法の間の訪あき述の権
即是実と分別し以用権実の弁役をあり
さればん給ハさつとし少へなり作を教りわきと
も法華経ならで成仏とつてはなへきと未
法にのこりハ存せてるとかくきとかて候ぬ
なりされば化の菩薩の出世ありて法華を
弘通あるべき因なればよくさうせられねともきこゆ
心せられきやうなきとも読文たしかならへいゆる
なふよもちくして日蓮上人出て候つねハ法華経

はしまりてつゝくとよなりつなりてとを後ハ後五百
歳の末法に本化の菩薩出世して経との奥
雑におひて此経を弘めん為に法華経
をひろめんし傍文とも提しまさ漢生の練さ
とりて傍梁勧集をとらしめて立ろめんられし
に伊勢の上部左まか京の荒重の方すとまむ
うひ三国の内の名僧に日蓮のことく本有経
をそしりし人ハもなしとそしつまて給ひ
を先生に名居すうきてに役すしめりて
日蓮なりまてあるとてもりしの名通りも本
前経を捨ありし例されおいひてとかせし
よいやく法華経なりとさつ実とて錺

経を捨さる念識ハかくて法華経を捨よきと
やされ候さにお代の政道を嬖毎すうハ
當世此敗をそしるによりね竹馬に鶏
ハ全父母の如くにあしとなるかの法経をたれ
のむよりくその経の恐敵と成ぬといふ禍
数大師の法人に川をさうせられは練その酒の
多くの業より悪く成て地獄修羅ハ弘法
より教育におちし人々とさされたり聖人
のあやまちはうすまてわりしあ小人のあやま
ちハおかさるかと孔子の金言おもひ出てもし
くよそ侍りつま

鶴大臣殿　後京極良経公三男九條前大府基家公号鶴殿又号称金大臣数井蛙抄にもあり

二百六十三
たづのおかいそのハ芦辺なるに
づる也鶴を飼おきつゝゆへに
とりもさへ僻るなりや

第二百六十三段
此段は何となる段なれどもはじめ常画を自
慢してたや合点をする歌人など申す人乃
見る事関などよ称んとのさるなとおきる
といましめてかくれたるものなりかやうのよし
かなしき不念にして聞そこなひてまなく
るしからされ二段の作者大なる道のお侍
家風語解の紀合自把の文字の手やうなと
念を入されはかへしてわきまへ事かる事也言と
いまも捨貴文と申すはかゝれいろはの語の字
をかならず其のナ文字をかけてまゝよく一切
くハへて千載よりよみなりけるに人にもわか
れつるといへるも念比よとふところをはとかくよき
なり

有宗入道　安倍晴明十五代の孫也重ぬる子なり陰陽以正三位
二百六十四
陰陽師有宗入道顕親より
のおりてぞ参らせてまゐりし
つくる花ぞさると儀まして
くわへつゝねるも也道をまもるものゝ子孫と

たとえば身のゆるみをつとむ　論語憲問篇禹稷躬稼而有天下中庸人道敏政地道敏樹

事をつとむ。細道ひとつのこして。みなはたけにつくりたまへと。いさめ侍りき。誠にすこしの地をもいたづらにおかん事は。益なき事也。食物薬種なとをもうへをくへし

第二百廿四段

人は家居の用意すべけれども後世も祈らまほしね
をもなり此段にありの住不定のことへの心得
まぬくる也これはのまきたる分なるべきさ
家人あまたみゆとも兄しく分べきは屋ともしも定
地のこ作り此段ときらぬ也べかるべし

多久助 久資とまうすな
楽人也多氏也今も伶
人に多の氏あり多は太の
義也出雲の大社をも延
喜式名帳には多社とか
く神武帝ノ子神八井耳
命ハ多氏の遠祖也
通憲入道 少納言入道信西也

二百廿五

多久助が申しけるは。通憲入道
舞の手の中に興ある
事どもをえらびて。磯の禅
師といひける女にをしへて

諸道に通ずる人也
磯禅師 東鑑六文治二年
三月一日預州妾静及母磯
禅師自京来于鎌倉云々下
略之
さやまき さやまきと云也
仏神の本縁 仏神の由来
縁起也
白拍子の根元 源平盛衰記
十七ニ云世に白拍子といふも
のあり漢家にハ虞氏楊
妃王昭君などといひしハ
皆是白拍子也我朝にてハ鳥
羽院の御宇に嶋の千歳若
前とて二人の遊女舞そ
めたり下略之
源の光行 河内守大監物源
氏物語に河内本と云あり

まはせけり。白き水干に
さやまきをささせ烏帽子を
ひきいれたれば。男舞と
ぞいひける。禅師がむすめ静
といひける。此芸をつぎ
けり。是白拍子の根元也。仏神
の本縁をうたふ。其後源光
行おほくの事をつくれり。
後鳥羽院の御作もあり亀

菊王とかしへさせ給ひしとそ

此人の作也

亀菊　東鑑二十五、承久三年五月武家背ク天氣ニ之起ハ依ニ舞女亀菊ガ申状ニ下略之　亀菊

を亀前ともいふ也

第二百廿五段

白拍子の事は前段にあらはせり異説を用ふることなかれ

二百廿六

後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古の誉ありけるが楽府の御論議の番に召されて七徳の舞をふたつ忘れたりければ五徳の冠者と異名をつきにけるを心うき事にして学問をすてゝ遁世したりけるを慈鎮和尚一芸あるものをば下部までもめしをきて不便にせさせたまひければ此信濃入道を扶持したまひけり。行長入道平家物語をつくりて。生仏といひける盲目に教へてかたらせけり。さて山門の事をことにゆゝしくかけり。九郎判官の事はくはしくしりて

信濃前司行長

稽古の誉　稽古の字尚書曰堯典に出たり又後漢書桓栄曰今日所蒙稽古之力也是は学向の力也と云義也

楽府　古楽府あり新楽府あり文選に楽府の詩数をのせたり元稹集白居易集等楽府の数甚多し長恨歌伝にも楽府伎女とあり又楽府雑録といふ書もあり

七徳舞　貞観七年正月更名破陣楽曰七徳舞七徳者蓋取禁暴戢兵保大定功安民和衆豊財之義也

一藝　退之進学解曰藝者無不庸

さて山門の事を　慈鎮にめしをかれしゆへにゆゝしくかける也

九郎判官　義経也

蒲冠者　従五位下三河守範頼於遠江蒲生御厨出生之

書のせうり。蒲冠者のす
間号ヲ蒲冠者ト頼朝弟也
はよくえうさり来るまや。おわりくのゑのたるを志
るしりうせり。武士のゑのらる代はさは。生仏
東國乃き方まで。武士みけとひさてうせまり。
彼生仏ゝ生れつきさ乃て急を。今代琵琶法師
はものるひさう本なり

第二百廿六段

源平盛衰記ニ云ふも平家のゑり争る承安
おわしと云うま作えもまちくるうま今まて
まきうせるは撿挍のゑり十二史之平家のゑり
まり平家法華経風布か〻鐘とて世も名門
のたすさとのとおゆんるめうもは平家のくゑやは
平家も別人の作のやうま異説ありと云へとも
兼好の説ありうらは他説を用ゆへうきまて

二百廿七
六時礼讃ハ法然上人の弟子。安
楽といひし僧。礼讃をあつ
めて作りまてつとめまし
きりとは後太藤后歓喜と云
僧がしまうせを定るおうの略
讃まるせり。一念代念仏乃ニ為初

六時礼讃　晋の恵遠法師廬山ニ住して蓮花漏を
きざみ六時を礼せし六時念
仏の權輿とす唐の善導大師六
時礼讃偈をえらひあつめて
日夜の勤行とす安楽か作
るりと云ハ異説なるやと

安楽　法然の弟子也住蓮安
楽と云二人あり後鳥羽院
の時別時念仏を始め六時礼
讃を唱て聴衆ハ貴賤群

集せしよし安楽念して出家せしかは後鳥羽院大に逆鱗ありて住蓮
安楽を罪におこなはる官人秀能に仰て六条河原にて安楽を斬 法名紫玉
太巻 廣隆寺也巻氏の人にてありしか又太巻寺とも云也 善観房
法事讃 両巻上下あり是も善導作也略していふせつきよくの善観房が
下巻 也後嵯峨院の御代よりはし
まれり。法事の讃をおかしく音頭をつけしめた
る也

第二百九十七段

あて経の根本の代はそのもとをりをしる由き仏もをとかそりとの末代よおはしたいうえそらひるとをもよくしるし玉ふ先仏なりその代よいそりくかの菩薩より来りてかの法を忘ろめむよ当時の法成敗をしつさる日本へあつしく聞いまそて此国をとかまつりらんすうつひまし心あつむしへねんは法よとおかうすとうまへく西への縁まのことるべき候なり

二百九八
千本の釈迦念仏は文永の比如輪上人始られけり

十本の釈迦念仏
文永　亀山院年号
如輪上人

第二百廿八段　二百廿九

此段は物初めのとき細工はすこしにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたくたゝず

妙観　元亨釈書云勝尾寺講堂観音像宝亀十一年七月十八日比丘妙観刻之千臂十月荘厳端厳又加四天王像凡五尊二十日而成八月十八日妙観合掌而化観音之霊応也　仲芳撰列勝尾寺募縁疏にも妙観彫像のことあり

第二百廿九段

此段は儀理あるとて種々経をとつる人
相しるべしさつるへきかしたとへ此かれ名も流もよく
よくきれぬかたなをもつかふて用ゆるで上手
のきこえありといふ儀なるべし

二百卅

五条内裏　後醍醐院御皇居なりといひつたへたり

藤大納言云　未詳の

云家まで八切のゝしね狐せ　鍛錬せねど未練と

五條内裏にはばけものありけり。藤大納言殿かたられ侍りしは。殿上人ども黒戸にて碁うちけるに、みすをかゝげて見るものあり。たそと見むきたれば、狐人のやうについゐてさしのぞきたるを、あれきつねよととよまれて、まどひにげにけり。未練のきつねばけそんじけるにこそ

第二百卅段

近衛の院の御時頼政はいつはり鵺をゑの
清盛の舟よりさんきうりしわさきかり罰みとは
そのこへのあはうすあわしむ時の鵺なれはとけ
物とはふりなるさまおほくそゑもめあやし
きまりいはれ狐狸のあやまさとしてつき世俗は不
定と伯物はなすさきの世とはまあとりまてそ
けり

二百卅一

園別當入道 基氏卿天福二年十二月十七日上辞状出家法名園空

ゆうそうき 無双也

庖丁 日本庖下者のそしめハ四條家の庶流山蔭中納言

園の別當入道はさうなき庖
丁者なり。ある人のもとにて。
いみしき鯉をいたしたり

也荘子養生主篇ニ庖丁牛
を解ことを詳にあり丁氏よ
く庖厨のことをよくして宰烹
することゆへに庖丁と云也
ためしは　循縁と云
百日の鯉　めでて鯉をきうへんとせ　百日の内毎日つゝ
ゆけてやうへん　毎日
ゆうけきうんとすり
中山太政大臣
也一条相国と申き　西園寺公經公

まれはちう別当へ庖丁
をりんとやとさへともたやかく
うちいそんをいへとしめう
ひまうを別当へ庖さう入下
てば一度百日の鯉をきり侍
ふなど今日のまさ待つへきさまにお頌もすけくや
うきんとてきうれまうぷうしくつきくし
く奥ありて人とをもへつまとおかへ中山
太政大臣殿よかくりやされさ

つまされはかなやみ手をのまへよふうたくおれ
ゆうすりぎうとめへきへすくふくきうんとひ
さうんは程よりりうん何条百日の鯉をきうん
そとの語さりしなうくおもえしと人みうる
つま語まうりとおりしたくうまひて奥ある
よつまをし奥すうてやらしうすうう海さりたうす
也まれ人の御食接るをもつとそれしきやにせ
つま承したうも微にのまれとした甚とくうく
てとり出てうやとよしい人よ趣

人はぬきとうしゝ也
論語曰皆無猶之なき人也出納

孟子曰可以
之吝謂之有司
与可無以与与傷恵

をとらせたるをもつゐてよく
ろくをはからんとのひろまくとのあらはさし也。
れしむよしありくこんもんとなとひ。続頁の
まつをとらさせしもつきをもとめさつゝむへし

第二百卅段

此頃浮れきさまこと佛徳のゆかしたく
見なれ侍るを先のなどといへる古語とよ
くきゝしり侍れどもまことやうはなく
すひてのちは氣をせめつゝおもひさるまじなら
らぬ人の座敷に出て八百事とも落つ
なさまさな細さまずてようくぬ力勝茶の湯
道をしするをなすけれくもあらしき地と見
のりつきざるをも見んおもはさむハすくなう
人といふかくまさやの西東まで西東にありくも
世親も徳のみつけ人の事けいふくみきつえ
ねやうはすらしはもしろう道なるやし又軍陣
にてたりおとをたゝるれハむ附ゑてあくみなる
いふきまをいふとも物のまおもしきたく平性
よのあそのうち逢うぬ人のよきやうは人に
たのはまむ見ゆるもともくみてうれさわきはさ
ふありしこと落葉しつう頃なり

二百卅二

すべて人は無智無能なるべきことの世おろ人の子
のかん法するをおもしかしぬれ父の前なく人と地
いふそて史書の文をひきつりしさてのしくる
やえもとも前老の前までハ法しとこと
たがえしなり

第二百廿二段

ありがたきはひみようきねをとしへしを妙法の法
懺法見ぬひとく九よ又見んせしみしけるけりの
いひたちゆかつまひ生れ付悪形なりと見ええ
より抱志りよるすつ給ひ悪人なるへしと思しつく
善人とするつひ唐さ児を見合てをしゆかうよ
わたなりとやさかしとうこと色ともいきそおり
なすか智恵の名はあまたとも悪人とそしらぬ
ものなし性ハ善なりと孟子よりて毎ハすへての
天理なるへしわれく童と見る不利根純精の
急緩（きうくゎん）抱いひのきやきををそこさ悪の言のなさひ
さこ舌あつひのあくことに逆ひかかなるところ
生れ付ハかりめあつきとかくさりとせ悟よ
そしつまし給つる児の智恵の乱れゆきぬ抱るなり
それを親のえ志らて見るをみせぬのこころをを地
人よむとさて目あたまにて悲く悪よきをつこえ侍
れ明君にをと志り的文字をとまるふとあれをおさき
らかは、さるかわやの悪精なる子孫わむひ毎も
おちりまし侍く

二百卅三

むね法師乃抱るり
平家物語なるへし

又ある人乃許にて。琵琶法師

ちう　柱の字なり琴にそてハ
おとちとよむ琵琶にてハ

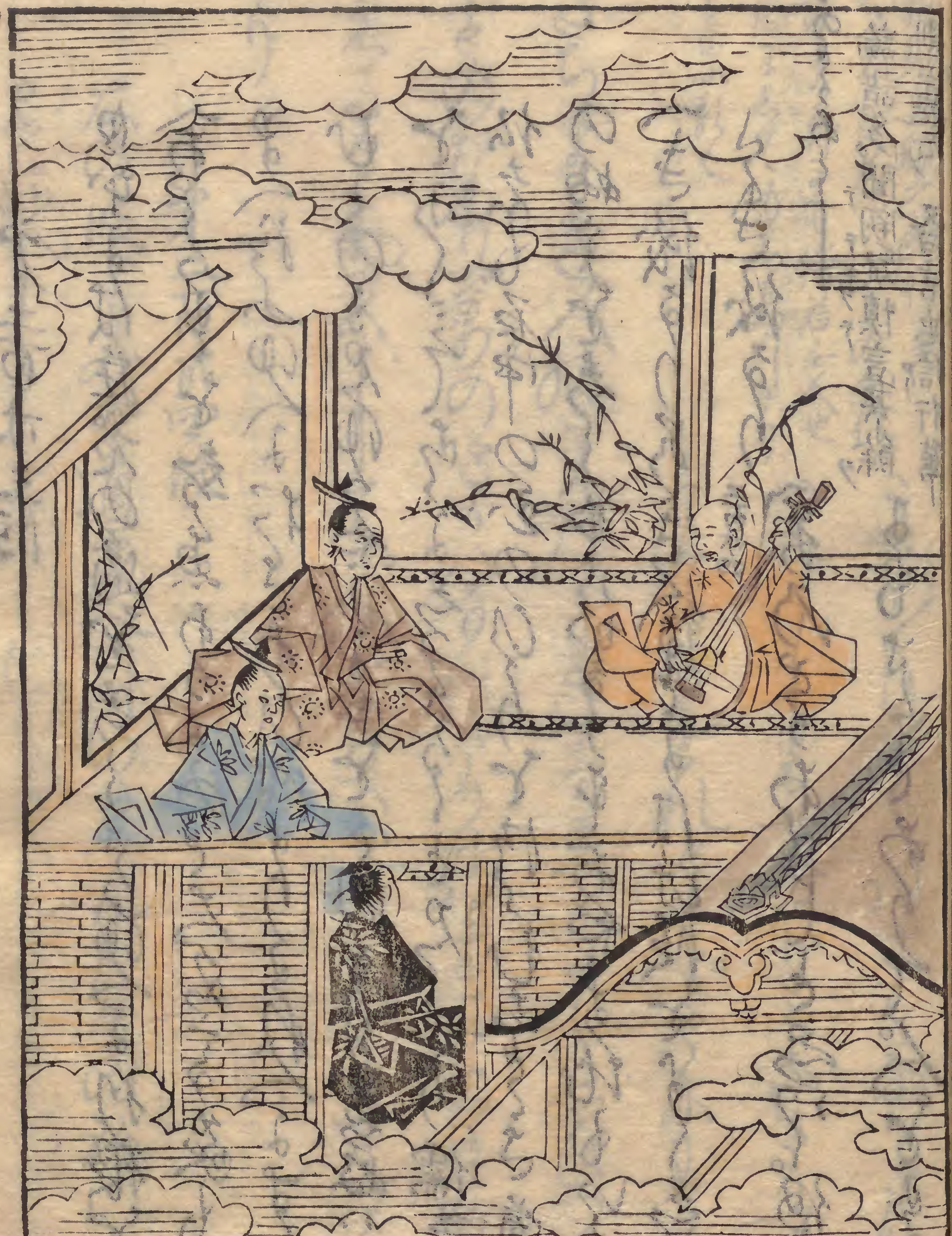
此物語をきかんとてびはを

ちうとよむなり絃との
すの末なり衆人乃琵琶（ひわ）の
の柱ハ四川比巴法師の柱ハ
ゑ川あり

めしよせけるよちうの也とも
おちるとしかは。作りて流

つゐでおもしろし　つゐでを
すぐしおほせ生長と云
でかしたるつかひとよむべし
ひハあやまりの琴ひく人
つゐでおかすべし

けよといふに。ある男の中に。あしからずと見ゆる男。ふるきひさくの柄ありやなどいふを見れば。つめをおふしたり。琵琶などひくにこそ。めくら法師の琵琶。その沙汰にも及ばぬ事なるを。道に心得たるよしにやと。かたはらいたかりき。ひさくの柄ハ。ひもの木とかやいひて。よからぬ物に。とある人おほせられし。わかき人ハ。すこしの事も。よく見え。わろく見ゆるなり



第二百廿三段

此本には荘老の道を志しさらゆへに利根を喜
へおうかとを知恵あつるのとたとめるる敢も
ま人に於ゆへはたきおひ付よりるれ人にすき
むとのこ見ゆうやうに心をとゝめすり為ぬハ是
をふくこそあるまし志すきうてと見えたり儒者も
仏者も石中の玉のひかりをはなむあととさ道徳
の始りを志るへもハかまうをおやまむもいとく
へき儀なりおとさ人にあらとすはけ段をよくさせ
さき儀なり 二百廿四 第乃さらあるしと云ふ何す
いもさとをありてへとなん
方のとうあるし

論語多聞闕疑慎言其餘則寡尤又曰言忠信行篤敬雖蛮貊之邦行矣

示えるる気あ ゆろ祢まて傍若無人也 俗まちて志ちもわしより とにふ形と

とのすれ うやくしく謂すくふかうるんは
ハ志かし男女老かくらふさうる人
こそよまれともふとふかふく
かちうよきさ人はうりしきこそ見ゆるく也ひつろ
るとのなり第のさかハるれうはまよ上てのめき
示えるる氣あしてへとるいしろよするる
あり

第二百廿四段

夫の段ハみな道家へ引いまんための稿门と
見給へし

志らすしもあらし志らそ
をこかハおかしといふ義也
うらゝかにすなほにあき
らかにと也

二百卅五

人乃物をとひたるに志らは
しもあらしありのまゝに
いはんハをこかましとにや心まとハすやうにか
へりことしたるハよからぬ事也志りたる事も
猶さたかにと思ひてやとふらん又誠にしらぬ
人もなとかなからんうらゝかにいひきかせたらん
ハおとなしくきこえなまし人ハいまたきゝ
およはぬ事を我しりたるまゝにさてもその
人の事のあさましさなとはかりいひやり
たれハいかなる事のあるにかとおしかへしと
ひにやるこそ心つきなけれ世にふりぬることを
もおのつからきゝもらすあたりもあれハおほ
つかなからぬやうにつけやりたらんあしか
るへき事かハかやうの事ハ物なれぬ人のある
事也

第二百卅六段

生れ付てとのゝ秘密なる人あるか今も
主ハ只今いのちの通ふしとれいてあるへしとて
こへハいやちとよそへまかりまゐりくるなりと

かくるとゆへ猶きゝ度得しくて再三よひれ出ハ
ふるきふうりて室町通よりさくりたちとも
いはえん偽りさは暖ハさやうの心ゆの志ありき
かくぎをさうひるの暖也いふは暖よかくも
しらてもむしするたつのよすあつら傳相
傳の秘事と世乃の葉もろとのおもくあさ
きうふとふへふあそれとはふ暖りはあくもよく
よく分別してかやうの暖をハこゝにをえへき
すり卒忽すつものゝどふ滴しさるをどうよ
あれわさ滴し記義なる李四條の大納言公任
のつやまひよふしてれいきし時たる武の高遠
衣冠たゞしくしてしるときゝうりれ絶々と

までちとらうやしきてみ田きれあつとせ詠
の桔梗の實の男とふとなかりし山ふちいろ
きろきりしの船といふ方ハ清おもよもれ稀なる
なされしゆへ貫之の桐坂の實の清水よかけ見
えていまゝや引らむ望月の駒とやよて気ふ帰
し合せてかん傳りよそし紀ハ臣孫まうさ係
やうなれとも数遍と邪つまむハ志そのかよ貫之
のそらよあまらせ傳つはかしむとをえしたり
まとりされきまは公任々その不審もし
てらし初よかろへの人ゝは之銭かさりけて
かんへの子西へまうりて清へつひのうちはと
りて我をひさなれるのあものとさもくかとれ

しハ心ある紀人々をはしくまそしつゝ彼方の宮
遠白衣（ゆへ）よそうまし〳〵れ病氣ハ初とかはるゝ世話
ふと念はよろづ臥ハ時そしつゝ后今
道をはかくこそともへき縁ありきと又感し
あつまとそく
二百卅六 主ある家ふるびずもろなる人心のまゝ年へ今る
ふるべしおのしうき示すのいへ石狐人そこらず
狐すゝろし 白氏文集第一凶宅ノ詩ニ梟鳴キ松桂ノ枝ニ狐蔵ル蘭菊ノ叢ニ さうへ狐すくろうやうれ拗を。
こゝハ 山彦（コダマ） 木神 空谷（コダマ） 人をふせうまれば不見へかれ
響 樹神（コダマ） 和名第二云木
選蕪城賦木魅山鬼今案木ハ まいりすまぬあるまなとふ
魅ハ即樹神也 和名ニ古太万ト きしうねかちをあらハ
又こだまと云ふ 木の精をいふ 神ハ忌ミ忌如ニ家く拗也。又こみよハ又ゝこち
明鏡臺ノ 六祖日明鏡亦非臺 古徳云胡來胡現漢來漢現 なすきかへよ。よろ川の氣末
つそうつゞみよ又ゝちあつまりはぞ
らさし海し。虚空よく拗をしつ。これつかある
まゝ念このかしきましふまりうそを心としふ言の
のすきこうやあらん。こゝろすぬしあゝまし
くは。胸れうちふぞとそく乃をる入きそう
むくまのし

第二百卅六段

神の字をかミと和訓せしハ鏡といふ中略の
ことばなり神道にハ清浄を肝要として濁
をきらふゆへに二番目のが文字をのぞきてかみ
とは名付奉るとかや扨國大明神の社壇の
うちへ参詣して伽羅かまうえんの沉香まて
本像を作るべきとて言ふ野の本宮真山より入
されしかは當國の二位殿かなしく思ひて
神社の内には天の羽車といふものを作りて
本像をはじめとしてもろもろの像ひしましそのや
うまれしてわうしくそ作れし一切の經法
ミ法つりし鐘の數までも元處すれハ郷方はつゞり内

まめのあれハなすこともせバ彼ハ心法のさたをすこ
しかあらそひて神道をみな志らせよ紀と
おもひて心さしおろかなむ殊勝の法也

大社 神名帳には多く社と出 二百廿七
出雲乃國风大社八月廿記に
八素盞嗚尊の子大己貴と祭
といひ神祇令には素盞
嗚也といふ又杵春明神と
も号する也
志られすかし 右巻の某
聖海上人
かひもちの
獅子狛犬

丹波よ出雲といふ所あり大
社をうつしてめでたくつくれり
志だのなにがしとかや志
る所なれバ秋の比聖海上人。
そのほかも人あまたいざなひて
いざたまへ出雲拝みにとて。かいもちひめさせんとて具

しもていきたるに。各おの〳〵拝みてゆかしく信お
こしけり。御前なる獅子こま犬そむきてう
しろさまにたちたりけれバ上人いみじく感
じておふめでたや。この獅子のたちやういとめづ
らし。ふかきゆゑあらんと涙ぐみて。いかに殿ばら
殊勝のことハ御覧じとがめずや。無下なりとい
へバ。おの〳〵あやしみて。誠に他にことなりけり
ま。都のつとにかたらんなどいふに。上人なほゆかし
がりて。おとなしく物しりぬべき顔したる

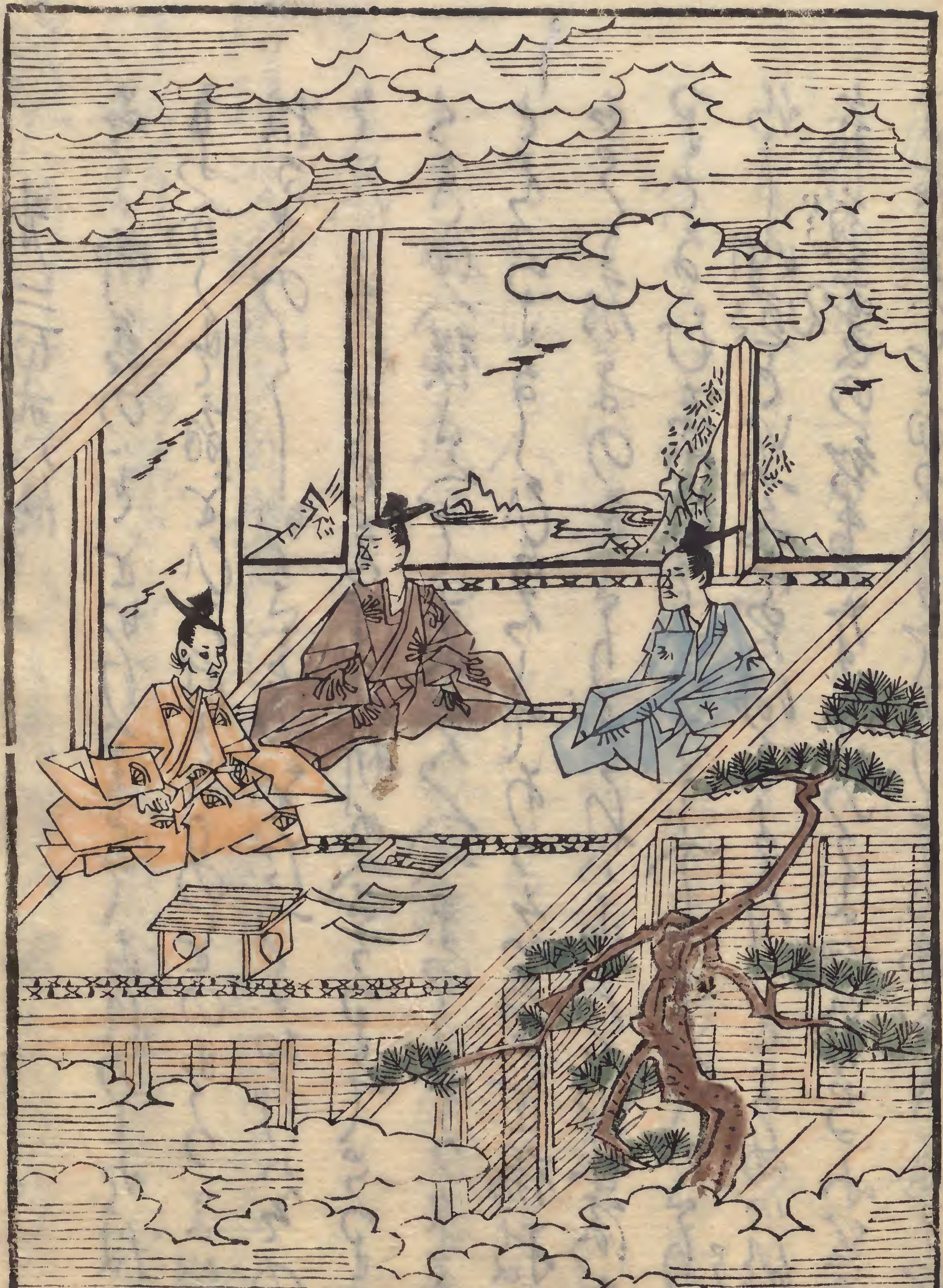
神変と思ひて。此社の獅子のたてられやう。定
めてならひある事に侍らん。ちと承らばやといはれ
ければ。其事に候。さがなきわらはどもの仕
まつり。奇怪に候事なりとて。さしよりて
すへなをしていにければ上人の感涙いたつ
らになりにけり

第二百卅七段

いふ給ぬれとも生れ付愚鈍にしてよの綾伝
師しもさき経をみんまとも其後の流とも其
家々をおけれともかつく聖道の僧にかけし又愚癡
すりぬる道にもおまろもに文のまへに経典の見
さまれハ魔障を為に依(云)て身持不思儀
をいふかんと心まに悪心の僧非無の施の三
なるの来迎をおもふとおもひしよりとゆきて丹後
の先徳寛朝僧都と云人由緒(きゝとう)の神中に来る
をいまそかのさなるの中なるをいへきまれて
古狸まて侍しある禅僧園の核のより道中
鐡をおとこらへぬいふせてさますにおもひて孫
これハ後にお所々の鐘を奉りてうらむるところけさ
ハいふところされしもかうを人のよく葬つ讀
経をもしらうかむとおもひ猿おけゆきて見
まさを鐘をまてハ持つまを為(やり)子まて侍し給すも思ひ
すしみてあるもまに不なりけりわきさらけし又
かくいふそて侍もつきことを誠侍せぬもまことの
心よいハおもしさる

柳筥(ヤナイハコ)ハ硯短冊(タンザク)或鞠(マリ)冠(カフリ)或又追(ツイ)二冊
善の時よ硯まて入置をまぬ家
基あり柳をもつて筥(ツク)らせ
けさの本数重半代筆後
あり流短冊をもとくて進上乃
ところ冷泉家ニ八重にて
らへらしまり又三条三光
院のお所にて重半よりり

やうよいそこにすゆるものにだ
ていまようこさ侍ひよしへ
さりやまつおもふとハさてさま
よそさて本式おもひより。



言函代筆あり吉田兼好半をもちひ追善の料紙とをゆうまは重を用ゆるあり

紙衣ありと通てゆひ付く。あくつるをたてはらはふとさたりし筆あるはよしと三

三条右大臣 勘解由小路 世尊寺也行成の子孫能書の家之

条右大臣殿御あいれき勘解由小路乃家の能書の人にかりかもたてはまゐりをとう事かし心よりことさ侮りすへらる侍りき

第二百弐八段

むかしは柳営のことをかけりとてあれのこゝろはおもふ人とて顔をひろけゝくゝのとのもろうに楊枝をとのこしかささのをたつるにおけハそのゝ比ゝされて見えずす文祈めへさうまてとう主まくさゆへ横さへてすへきへへまひてまうかよきとおうまるすひゑへてあるえ之草を楊枝のおもく額よのもとりきれいあるひて落たつとるむむゑつけるさとし下しきのかへかゝり作し附宜とい文字次ほよりしとよめハ陰氣癒变の紛毒なく八つるハ伊勢やる小笠原また家人ともかうひえさりとも無すさき事れほうえへしさうまとてへつよまりいうあきたつけるをいへ一通りよしかうひてとくへき級まりわさくしの紛毒をうりまてすぬすりのゝ作うまゆ備すて恥をかくハ後悔をとも益なへうもぞ此後たとゑ後生の勇またてされとも礼法を人にま志了をしらめよかけつとと為ゝまみ人の道なり善悪のを性をさけあうへなり

言意九

御陰身近交ろ自讃とて七ヶ条書とてあるうをありこれ馬藝させ人へとすさうけるとも也。これためしをおもひて自讃の事七あり

寂勝光院 拾芥云法性寺建

人おほくつれて花見ありき

春門院 此院方の参代重躬

き信頼か落ふるは相ありと

いひふるとおもふ心也

しに、最勝光院乃為まてはのこ此馬をもしらしむるを見んて今へ安るをもいまり抱ふくは馬たふまとく落下。志しかんたまへとて立と侮りさうに大なる綫たんせてむかふおもてるをえさいふして。の家人泥(ひと)去乃井よこうひ人を翔(と)れおやまらたりことも。人之れ感す

當代

坊 春宮坊也位まつりたまはゝ

當代いまた坊にておはしま

てきこまておはしますか時乃ことをいふ

しし此万里(まての)小路殿は不為

万里小路殿 里の所不為に

春宮のはか所たるをいふ

ろ也

堀川大納言殿祗

堀川大納言 師信公也後醍

醐春宮乃時乃大夫也花山の

院流堀川と号ス

候し頃堀よりへよう候

事て参られたりし不。論

悪紫之奪朱也 論語陽貨篇

語乃四文六代書をそれ立

ろきをかひてたゝ今所不て亦一さ紀乃

おきて見るふてをふくむを以ふ文を御読み坊

らきて紀乃おるをてしれ朱を所読人に見れも

所読人よ出されぬ本り桜よく見てさうんのすも

仰ことにて。定家すること侍らさるに。ふ九乃字の
そこく乃ゆゑをも侍りとやさるものは。あまた
う綾しとて。ちくまへせたまひき。など
のをも見えとたく壽代すうまでもしの
人きいさくみのすとをいうしく自讃し
たる也。後鳥羽院乃御言に。袖と袂と一首の
うちにおしかりなんやと。定家卿に尋ね仰ら

定今生京極中納言也定家
自讃の事未考之

せられしに。秋乃野の草の
袂か花すゝき穂に出てまねく袖と見えら
むと侍れは。何事かさふらふべきとや申され
たる事も。時にあたりて。本歌を覚悟す。道の
冥加なり。高運なりなど。ことことしくしるしを
かれ侍るなり。九條相國
伊通公乃款状にも。ことなる
ことなき題目をもかきのせ
て自讃せられたり
常在光院のつき鐘の銘
は。在兼卿の草也。行房朝臣

九条相国
欵状 禁中へ官位などのぞミ あるひは訴訟などを上る時
乃状也。公家にハ奏状とも愁状とも也
くハんとハのまさる事也

常在光院 旧跡在東山ニ
在兼卿 参議正二位菅原家ノ也。唐橋の祖。在良ゟ芽輔方
八世の孫也

弟の也 下書也詠草文字
となのとし
行房 世尊寺行成ハより十代の孫也 経尹の息也行尹乃弟也
いろさ 模範

清書していつくようにさせん
ともしは。筆り乃への彼筆
を且出しく。かん務侍しりけり。
乃かふ夕をそふれも。ある百里ありきこ西と
いふるあり。陽唐の韻とかんゆるなふ。百里あや
まりとも。ちよしとよくそかんせまつま
ふ。とのまきうらるゑるりとて。筆者のをら〳〵い
ひやりたるよ。あやまり侍ますま。数行もうらしと

数行 行の字庚韻にも陽韻にもいまり 庚韻にて

さらへしとのゝつの侍まし。数

八行歩の義也陽韻にて八行列乃義也数韻にてハ行跡徳行の義也去しまて数行を数歩の義とらしハ庚韻ふ承へし 陽韻すまハたかつらしとつみ也
二塔 山門乃東塔西塔横川也
常ノ行堂
龍華院
佐理 正三位前ノ太宰ノ大弐参議佐理ノ卿小野ノ宮孫一條ノ院長徳四年七月卒五十五歳 公卿ノ補任
行成 正二位太宰ノ権帥権大納言行成ノ卿円融院御宇天禄三年誕生後一条ノ院万寿三ノ年十二月卒五十六 公卿補任

行もいうか添へきよふうらし
数歩の心をあるはりうるし
人あまこなろひて。三塔順
礼乃ろの侍しは。横川の常行
堂のうち。龍華院とうふるに
かうさ額あり。佐理行成
のあひたるかいあつまらく。
いまこ改せんとも侍らりと。

堂僧こと〳〵しく申侍し
を。行成ならハうらかきあるへ
し。佐理ならハ裏書あるへ
からすといひたりしに。裏ハ
塵つもり虫乃巣にていふ
せけなるを。よくはきのこひて
各見侍しに。行成位署
名字・年号さたかに見え侍しか
ハ人ミな興に入

位署　姓名の上官位を云連
ぬを位署といふ

那蘭陀寺にて。道眼ひじり
談義せしに。八災といふことを
忘れて。誰かおほえ給と云ひ
しを。所化みなおほえざり
しに。つほねのうちより。これ〳〵にやとい
ひ出したれハいミしく感し侍りき
賢助僧正にともなひて加持
香水を見侍りしに。陣乃外
まで僧都見えず。法師ども

いまたはてぬ程に僧都

那蘭陀寺　道眼　ひじりは
八災　憂歓苦楽尋伺出息入息
を八災と云荒乗法教にあ
り
所化　師をうけて能化と云弟子
を所化といふなり
賢助僧正　醍醐三宝院也日
野家の人也
加持香水　正月八日より十
四日の間まで流法ありける
を後七日と云其間に云
乃加持ありかのは仏の三

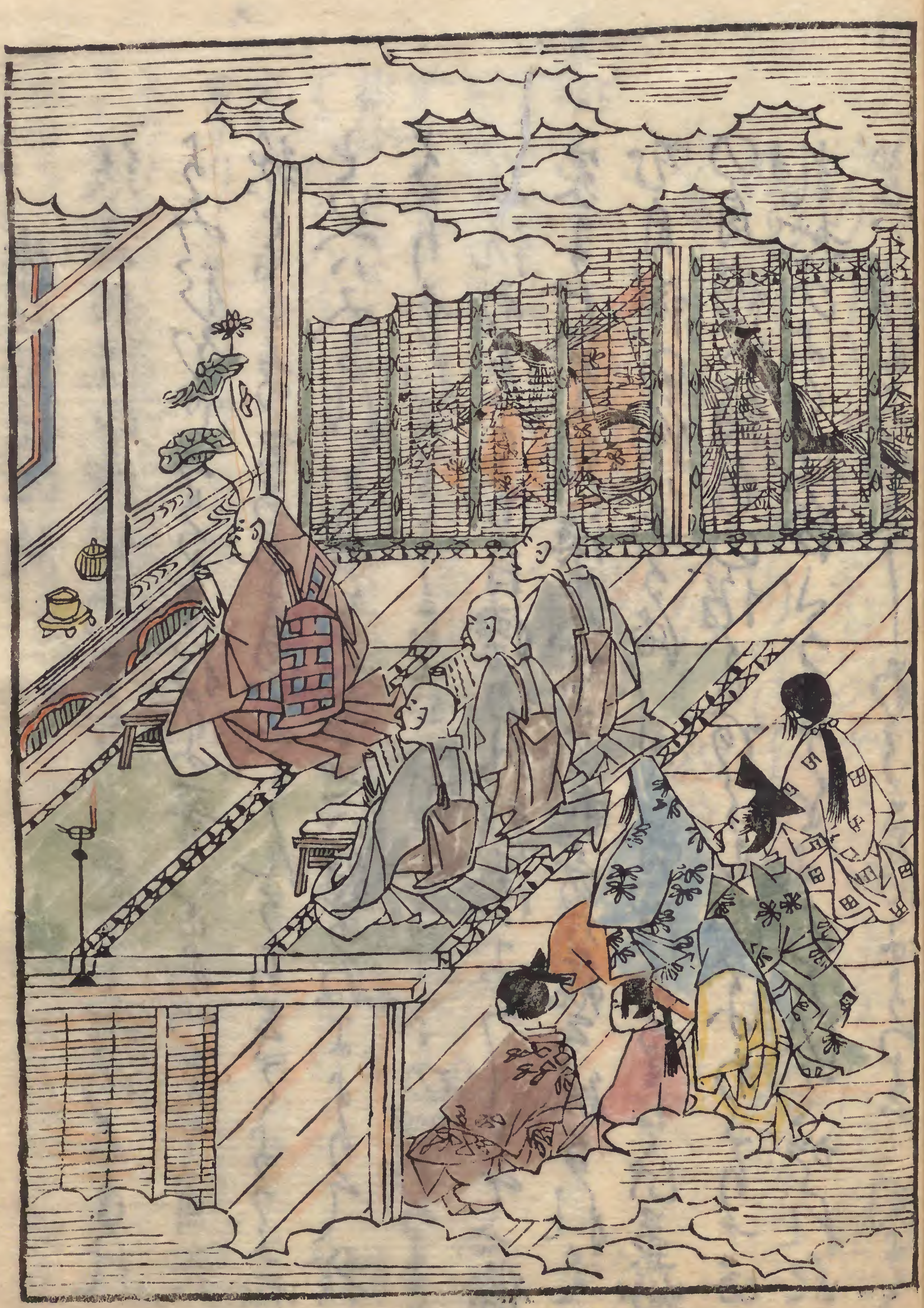
密なり持とハ行者の三業
此彼ノ三密を此業に持なり
我加持といふせ

を返して。いとゞたふとさハふかりに。
おしさ悔する六字あおれくて。
えりとめおそれとひていとえへしくしく
出さるゝしとぞふりあれをとめて おりせ
よそいそましにくさのくやうてくしてい
てぬ

千本の寺 釈迦堂也 二月十五日ハ 遺教経(ゆいけうきやう)の法をとなふ

へし
二月十五日月あわき頼う
ちまくくみ本乃てうにまふ
てうしろよりまへてぞまりかへ悔くかくてく。

随喜渇仰し。優なる女は姿にふかく人よりまさりて
なりけるへてむさふぬうれてふかひなともう
ふもありすきハむんおしとむひくぜりのきれ
流にぞねよりて我ふしさ悔すれハさちね。そ
後あるに不浄のあるさ女房にぞころとも
それしつゝそてに。座下に文なすさ人よおり
まりとみねらしなるとをすんあるまし。情(なさけ)
おしと恨(うらみ)なる人ふんあるぞの路ひ出しさるふ。
さしふそて幽ね侍らねとよてやさねばるの後



よきて侍しハ彼聴聞の夜御局の内より
人の御覧しりてさふらふ女房をつくりた
てゝいたし給てびんよくハことばなどかけも
のぞそのありさままいりて申せ興あらん
とてはかり給ひけるとぞ

第二百卅九の歌

後鳥羽院の御製をもし出されたる時のよまれ
よみなおさせ給ふとおなじ哥をあつめて自讃
歌とやらむ云ありまなこやんごとなきをよろうね
といふハ又古歌をも用ゐる人あり他ハ旧あねまよりて我
ありかむかしとやまをかへりて卑下の心あるまと
ふ説あまたも自讃の外ぶ同じうしとて二條
家ヿすはさ議ふせまて和家ハ㓛を続すれん
む自讃の儀ハあらゆるしき道理あるまくと此兼好
の自讃ハ詩家の作にいふもの時ふあらはりての
氣勢のよく符合する事をよろこびてかかれた
也ハ傍まる心をしわらさ候ようまそて聞あく

作り中にも七ヶ条同の女に心をゆるされさせ
給ふ記をもしへまりかろくいやうの思なくハ
かまへす恥辱に及はむねすり

八月十五日の月十三日の夜婁宿也此宿清明なる故なり 二百四十

婁宿 東方ノ七星角亢氐房心尾箕 北方ノ七星斗牛女虚危室壁 西方ノ七星奎婁胃昴畢觜参 南方ノ七星井鬼柳星張翼軫

正月一日より十二月晦日まて廿八宿を一星つゝ毎日にあてゝその日の宿とす近代まうしよりする暦には廿八宿を次第して日数に配し日々にハ吉備公の相傳なりとて別にお後まゝしりうるす是中比大内回禄する日牛宿なりとて牛を除て廿七宿とすり今かんくへ見れハ八月十五九月十三婁宿にあたるよりかとふ兼好も牛宿を除きたる暦用ひらるる事し八月一角二九三氐四房五心六尾七箕八斗九女十虚十一危十二室十三壁十四奎十五婁也九月一氐二房三心四尾五箕六斗七女八虚九危十室十一壁十二奎十三婁也 婁宿清明未考之

月をもてあそぶに良夜(りやうや)とハ

第二百四十號

八月十五日の明月ハもろこしにも同しかれと九月十
三夜を明月に定らるゝハ宇多院の御時より
我朝にのミもちゐるなりやうに侍りしかれハしく
こゝろへし

信夫浦(しのぶうら) 新古今に 奥州に信夫郡(のこほり)あり 二百廿
うちハへてくるしきものハ人めのミ
志のふ乃うらのあまのたくなハ
此歌諸のことを以て志の不也
ふまうなそへふるなり

志のふ乃浦れあまのたくなハを
不せくら梅れ山かすミもろ人
志をかきくらんにまりすく通そ

不せく 不狭 源氏類聚に
あり
ふせく梅の山 山城の名不也
暗部山(くらぶやま) 古今に
むかしハ花も白かりけれともくらふ梅やま
やミにこゆとも志るくぞありける
今按に暗布山とかけり
貫之のうたに
秋きりのたちぬる時ハくらふ山
おほつかなくそ見えわたりける
鞍馬山ハ別にあり
そうかく 兄弟也
まけるき 不似合義也
ゆきかひしき 豊饒(ニギハヒ) 冨貴(トミトキ)
也
あつま人 田舎人なり
さそふあをは

むかしの文にも浅からぬ家との
折〻は梅しくの色々たきて
とも折〻のめでおやあらたか
らゆかしてふるさとにもむら
へあふくふらんことものゝゆかり
ねへし世にありなからいつ女乃
まけるき紀光法師おやしれ
あつま人なりしもゆきかひし
きよつきそさそふあをは

古今　小町かうた
侘ぬれば身をうき草のねをたえて
さそふ水あらハいなんとぞおもふ
なかうど　媒也　遊仙窟ニ桂心
とりもち媒妁人也双方よりき
やうまいらせをもらひて婚姻
とゝのふる也
あいなさよ　無益とかけり
こゝまでハあぢきなきさまをいふ
なり
葉山しげ山
筑波山は山しげ山しげゝれど
おもひいるにハさはらざりけり
あたら身を　惜乃字をかく
をしむとよめり
梅乃花かうばしき夜
伊勢物語にいへる又のと
しのむ月に梅のさかりに

なかうど、いづかたも心に
くきさまにいひなして、し
られずしらぬ人をむかへも
てきたらんあいなさよ。何
事をかうちいづることの葉にせ
む。年月のつらさをも、わ
けこし葉山のなどもあひか
たらはんこそ、つきせぬことの
葉にてもあらめ。すべてよ

こぞをこひていきてたちて
見ゐて見とあり
みかきが原　御垣原　大和の名所　不審の
皇居の門のかきのほとりくさはらハ
[illegible]にや
らんも姫小松千代をそれかの
ねよやハ見て　金葉集

の人のとりまかなひたらん。うた
て心づきなき事おほかるべし。よき女
ならんにつけても。しなくだり見
にくゝ。年もたけなん男ハ。かくあやしき身のために
あたら身をいたづらになさんやハと。人も心おとりせら
れ。我身ハむかひゐたらんも。影はづかしくおぼえなん。い
とこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜のおぼろ月にた
たずみ。みかきがはらの露わけいでん。ありあけの空も。我身さ
まにしのばるべくもなからん人ハ。たゞ色このまざらんにハし
かじ

第二百四十一段

此段ハ前よりもおもくしてやさしからねとも此文段をいましめたる段也人此段の相續すへきもよく〳〵よみきゝてよく深く味ハヽ
さるへし

望月のまとかなる事ハ 易豊卦ニ云月盈則食釈名ニ月闕也満則缺也望月満之名也日月遥ニ相望者也

二百卆二

望月のまとかなる事ハしはらくも住せすやかてかけぬ心とめぬ人ハ一夜の中にさまてかはるさまも見えぬにやあらん病のおもるも住するひまなくして死期すてに近しされともいまた

病気なくとも死にむかふほどにて。常住
平生此念をはなさずして生の中におもひなす
残なくして後世のよろこびを願せんとおもふべし
ふ。病をうけて死門にむかふ時。不乱一事も残
さん。ひたすらに年月の懈怠を悔てば
ひとしくあちらするをとりて命をまつべくせる。
夜を日につきてあらゆる彼事をさしくる事
かしらんとねがひを打ちつゞるやうて却も
なきあれば。我身わづらひとりみなしてて

ねばさらにのこるかりゆんきのとまらんへい
ろき心ねをとゝへし。不乱を残して後勝あり
てなぶむりりんとせは不乱つくうれ。如幻(によげん)の

如幻の生　金剛経云。如夢幻泡影

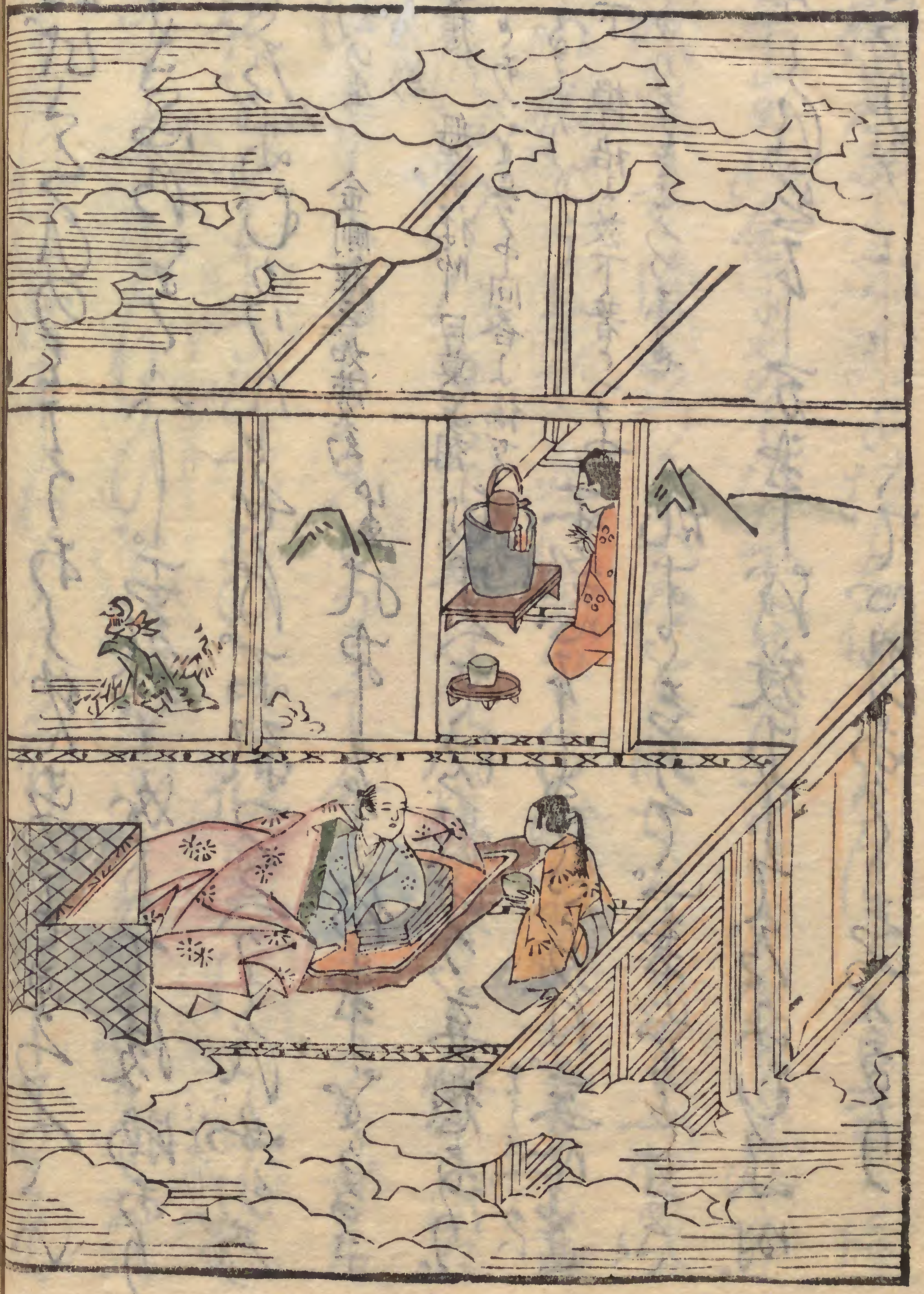
生此中に何事をかなさん

妄想　無業禅師曰莫妄想とあるを是中向答に語せらるゝあり

むすべて流転は妄想なり。

放下　禅語に放下著といふをはなつ義也

不乱心にきゝらは妄心(まうしん)迷(めい)
乱すとてありて一事をもしるす
へかれ無手万事残放下して心なむらひは。
さればなく不作なくて心性がなく成つゝなり



第二百四十二段

されば遁世をすゝめんとの段なり又ことしもはみ
ならひの身にても捨かねたる者あまた有はそ
の甲斐なきなるへし孫文末代よりうき世をと
ゝめ心さしあるものゝまされなほよりて大乗
の法をとく化の菩薩はさんけわひくれわれし
まり此等低なるの後世の弥ひやうハ又像
法の名の知識なきの遺跡なり今まの経の流るも
かうゆへは末法流布の一念妙典には世を捨よと
もさとれともなくて又ゝ受持読誦解説書写
の四種の行りとのこして此経をとく信されん
ハ我則歓喜諸仏亦然かくのときの人ハ諸仏

のおゆんりふとくろうりまれするのうち勇猛なり
あれ利精をなりまれを戒をお顚陪をとり
まうしのとみ付とよく

どうしゅん 長の字也 も
二百四十三
どうしなすへり遠順ふ

遠順 逆順也 佛眼遠禅師ノ云苦樂逆順道在其中ニ動静寒温自愧自悔

二つハ欲三つハ味 礼記曰 飲食男女人之大欲存焉

くつる事をびと人に苦楽のためなり楽ゆくハこれをおひまう事也これをもとむる時なし。楽欲するところは名なり。名に二種あり行とも名と云ふとのいまれなり。

二つは欲之べりハ味なり。よう门乃称多ひ此三つは悲んぞ顚倒乃悲なりなりて。それこれを此よろひありぞと知んさうんべりるそ志りし

第二百四十四段

佛菩薩の御目よりハころし見ともわろ人ある法事をなまハ楽と相りよ也たとへハ蝙蝠かさかさあふかうまゐて人のおゆむをおしハ空かしらハりきあるを見てらしといふりまあさ内きるゆえまれさを今顚倒なまとよられあり

佛説三身壽量無邊經ニ曰文
殊白テ佛ニ言ク我等從昔聞ク如來説
法ヲ如來何佛ヨリ聞此説法ヲ佛告文殊ニ
殊ニ言ク過テ四十一重内大院ヲ美ニ
毘盧遮那説法ス文殊重テ白佛
言四十一重内大院ハ何者カ是耶
世尊復言ク過テ十住十行十廻向
十地等覚ノ内大院ヲ兼妙覚地ノ
大毘盧遮那説法ス文殊重白佛
言妙覚地毘盧遮那從何佛
兼説法ヲ世尊復言ク妙覚地毘
盧遮那ハ兼ニ無始無終一心一念
本佛説法ヲ文殊重白佛言無
始無終一心一念本佛ハ兼何佛
説法ヲ世尊復言無始无終ノ
心一念本佛ハ兼ニ無心無念本佛ヲ
説法ヲ文殊重白仏言无心無
念本佛ハ兼何仏説法ヲ世尊復
言無心無念ノ本佛ノ上ニ更ニ無佛
随無ク前佛モ無後佛モ無心無念
本佛ハ以テ不思議ヲ為体ト無ク本主ト
来無ニ言ヲ性ニ無ニ十男性ニ云々
尽不記

二百四十四
八ゆうるゝし年々文よ四ていく
く仏さいゝかゝ地よりいらせき
いぶちゝう云仏よろへ乃あふ
なりとて文四人あり何とゝして仏
あいかゝやらんとて文文仏れをせ
しへよりてするあらりとこ
さうぷ文問さしへいひけるに仏
とて何をもしへ作まうとぞ文
こゝふかられもえさ記乃仏代
をしへによりてかあるなり
をとみとふをもをしへさしめは
まうす弟子乃仏ぞいふなる佛
ふしの作まれ給ひし時文字よりやふりけるぞ
ちよりやまさきまんとひへくまらかとひつめら
れてえとへ仏なり給ひとて殊人へ本かくりて異
しき

第二百四十四段

此草紙のはしにふしてや此世に生れてハねかハしか
るべきこそ我もわかあれと尹神てもなりて佛の
事をさとらせける事を忘根殊勝にはしとく疾生を
佛になりくされハ生死のくるしみをまぬかれ侍して夏
の夜の短かきさかりに月出されハあかしかたし冥途
黄泉の底にしつみて長夜の闇にまよひまとハむ事ハ
かなしき仏にあひまいらせやさしくてされハ仏法を信せ
ぬ一闡提の者ハきたなき人にたつときまれなるに
しの禅師か亜ハ人男服性成仏の心にやたちあ
ての人とえるこそなけれ仏と云もさしており
の人とはみなわれ我身をよく心得て仏をんま

とすハ信敬の心天下にうせさりんまと佛と八大
にさてみかされにて地獄餓鬼畜生これを三悪道と云脩
羅をくハへて四悪趣といふ人間天人まてを六道
といふ声聞縁覚菩薩まてまてを九界といへり
つよ別に一界として佛界あり仏界をそへて十界とそ
此十界之外上の如来をはかりしけなくし三千世界
にあまねくましまして梵天帝釈もあつめたまひて
此佛にハ十号とて十の御名ありさまさまの時にて不二
なれとも人界より佛界まて此信不思議あり我ら
天上さきの衆生のすむ娑婆世界をは忍土といひ
又別にありて日居にて号せる因縁覚
の二乗にて此まのしまつ須不思方便ちのし号す

菩薩の流布あるをは変報土と号して仏
のはかあつてそれをは浄寂光土と号して此寂
光土には無相もなく生死もなくみちん
どなうくるしみもなけれとそ極楽とも
号せし一切衆生此仏界にうまれたまはんとて
かくれさるしるしの名を申す此衆生のく
るしみをたすけまて我とひとしき寿命
無量の佛身となさしめむとおもひしめせ大
乱あるゆへ彼寂光を出してあり凡儀をかり
て娑婆世界へ出世あるなり外典にいふも
賢人ハ五百歳に一度聖人ハ千年に一度出世と
見えたり佛の出世ハ五千六億七千万歳也

されハあらはれ給ひし御出世の時ハ仏日丸とて人称
まで八十種好しなまし轉輪聖王のかたちのこ
とく義良端正にして是れ見にあらそ胎内
にやとらせ給ふ前後にも種々の瑞相あり成
道の後は八常勇とて御身に光明あり丸まわり
かゝやきて弐二相八十種好のよそほひまします
其御すかたいめてたくねむごろにも衣香薫しましまして
一 又通力自在なる事は天魔鬼神の居ふ末に
おしよせ菩薩の御眸をとりて放ちて法説んずる
一 ことは釈の子孫あるれむもまされて丹花
の御唇をひらきて御説法ありさらに御声
ハ迦陵頻伽にもすくれて三千世界の外に

もきこえさせ給ふによりて他方の仏菩薩四天
王日月星の三光一切の天人大海の八大龍王
阿修羅伽樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人
おのおのまてあつまりてうやまひたてまつり白毫
のひかりを万八千の世界にてらさせ給ひ八万四千の
四種の花をふらせてかうふるかうふるき世なるをた
たるものゝ人をみちびき給ふ上代にはあるまじき
也或人の曰仏とけとて人をそ〳〵人の形にて
世相常念になるらすとて又心外無別法と
て像にはよらて只絶念なる心をこそ知給
とらひふされしおさへてふ物人のまて
三身如来のかたちをもきこえて釈尊にも五百

のたぐひおほけれどもこゝろをとゞめて而實不滅度常在
靈山佛壽無量なれはとゞこほりなくこゝろをとゞめてあき
ましくもいふやうなしけふ龍女の八歳の時又
をいひつゝあらはし給ふもこのお經の方便の一通
りなりけれどもある指教なり權教といへば佛は
すぐれたる人とはいふぞや久遠實成の佛説なり
されば成佛する事なし久遠實成の釋迦は
おほく行給ひて法華經の本文壽量品
をおもひてたふときことを念ずべきなり

何事も時にしたがふ徳はかはりなし近く源
氏物語も寛弘のはじめに出来しかども
百年あまり埋もれて康和の頃より
世に出ていまだかなはざりしに
大臣の時までは名をしる人もまれなる
ましかば定家卿の時にいたり世にあらはれてあ
つかふ事となれり定家卿の中院入道殿の
御相傳をうけ給はりて妙壽院のこまかく
源氏の義理を見出し給ひ流布の

ありて丸にも又あるとき何と心得てうるそ
かしらはいつより世の人あふぎてたまへの沈も
あまたせられしは清さそてあれこの見ゆる
まひ出されし唐の古きりとも見ゆるも
ひよりはし古きなをよく心のいかなれ
あるまま書物くはしくさとしの其名
沈もやはらき人まて要法らの本地
院なるにいふのしらせりをたてまつ
しるんて抄を作りまて板にちりばめ

世にひろめられるも法らの道春法印は
まして林又三郎信勝とて若年なれども
博古の名にえ新注の四書を講談法
海つりて見んよやれはしまされしまつ
いとよろしかるべき事なりとや侍し
遠藤宗務法橋は太平記講談せらる
是は儒学医学の名高き人にも見よも
這法をしく学をよみてきらせよとかね
尚せられしとも書のくいれるてる

しゆつしに信勝の父叔父かゝる宗
勝の祖父なとハみなきこえのともそのゝり
勝久ハ海につれもなすかとやうらん心を
とゝなき紀海に芸能流讀なすかれてた
つねしみんへつゝしら論するさ交迄をかへり
むそのゝきれし忠義能に及ぶら
もしてまかん侍しまれ流まし く葉に
の勝久のそうし給ひて侍らねて世に
かゝきとえこその時ハ大かさハ丸か交

古のうつに手付て名をとるに人にかゝら
こともなすうらしに今ハなすくさゝ葉
に手へつゝハいつるよりかゝるを出て
むとあやしくしそて侍まと思へハ丸か
めしつひしをれともの内よう流
とりつめつ心に我侍し名花ハ弥なん
をせ夾をはらをもかさつすへにあん
すへきこゝのれらぬをい海世にひろめ
て人のゝとききをおもちもうら今かまし

そ條あのしるしかしゆうなるにあら
されハさるまかくし恩きやうもなし
その斷をとりさしはさみてよしあし
ろすをそこそこのをなくなくよまさる
し侍る

慶安五壬辰暦
孟夏廿六日
長頭丸在判

日本政府圖書
内閣文庫

[illegible]

慶安五壬辰暦

[illegible]九月六日

長頭丸在判

国立公文書館
National Archives of Japan